

2021 年度武蔵野文化協会 3 月例会

おうばくしゅうこうふくじ

言問団子と黄檗宗弘福寺をめぐる

案内人：松原典明

(石造文化財調査研究所)

今回は、桜の名所、隅田堤（墨堤通り）から江戸情緒が残る粋な町、江戸っ子の憧れの町と云われた向島界隈を散策し、東京スカイツリー駅から三角の鳥居とライオンのいる三囲神社を訪ね、黄檗宗弘福寺を目指します。

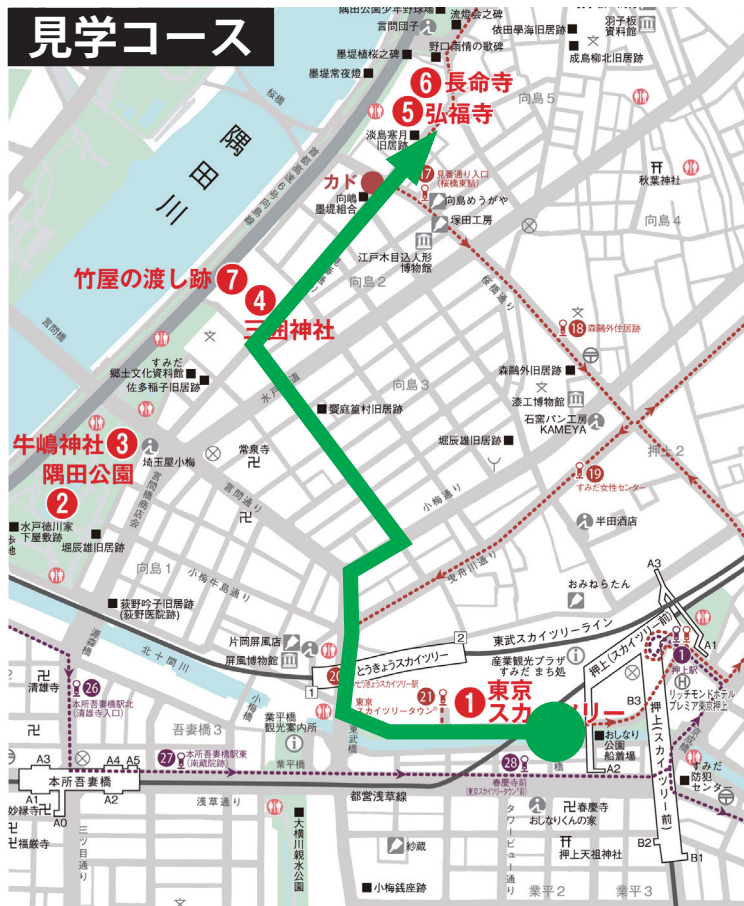
弘福寺は、ご存じの通り京都宇治の黄檗山萬福寺の末寺です。江戸時代に隠元隆琦によって広められた臨済宗黄檗派（江戸黄檗）の江戸の中心寺院の一つでした。江戸初期に各地に広まった黄檗宗寺院の発展の背景には、多くの大名や商人などによる外護・多くの民衆による信仰を背景に興隆しました。

武蔵野文化協会では、江戸黄檗を学ぶために、都内のいくつかの寺院を参詣しました。旗本藤堂家が開基した品川区大龍寺、大井大仏の名で親しまれた養玉寺の釈迦三尊像、500 体の羅漢を護持する目黒の五百羅漢寺では、江戸で最大の釈迦三尊をお参りし、江戸で最も早く隠元隆琦によって開基された海福寺（旧深川 - 瑞聖寺の補佐）を訪ね、江戸黄檗の中心寺院（触頭寺院）で毛利家や島津重豪など大名らが帰依をした港区瑞聖寺を参詣してまいりました。

今回参詣する弘福寺もまた、瑞聖寺を補佐し、小田原藩 2 代藩主・稲葉美濃守正則が開基、彦根藩井伊家・鳥取池田家など名だたる大名の帰依を集めた寺院です。隠元隆琦・二代木庵性瑫の高弟である鉄牛道機が開山した黄檗宗寺院です。

大名家の帰依、黄檗宗寺院との関係や黄檗宗独特の建築様式、仏像像様などを参詣し知ることが出来ると思います。また境内には、佐藤一斎や谷文晁、塙保一己、林述斎らと深く交流した鳥取若桜藩 5 代藩主池田定常（冠山）の亀趺碑などもお参りいたします。

弘福寺は、江戸の七福神としても有名です。黄檗宗独特大きなお腹と満面の笑みで布袋様が出迎えて下さいます。是非、布袋様とご縁を結んで下さい。



《見学コース - 行程往復約 3 時間》

集合出発：東京スカイツリー駅正面改札出口 1

⇒三囲神社（見学時間約 30 分）

三井家守護社（三井の本拠・江戸本町から見て東北の方向に当たることから鬼門として、この社を守護社とした。旧池袋三越店頭にあったライオンの像が寄付され境内にある。「三井高利」「越後屋」から屋号「三越呉服店」とした。ライオン像は、ロンドントラファルガー広場にあるライオン像がモデルとされる。）

⇒弘福寺（参拝時間約 1 時間～）

開山は、鉄牛道機。開基は、稲葉美濃守正則（春日局の孫で、幕閣として重用）。彦根藩井伊家・鳥取池田家などの外護。

鉄牛道機は、長門生まれ。京都洛西葉室山浄住寺を中興、相模小田原藩主稲葉正則の招きで紹太寺などの開山。福祉事業に尽くし、鉄眼道光の「大蔵経」の開版に協力し、下総匝瑳郡の椿海の干拓などの社会事業にも力を入れた。椿海跡地近くに福聚寺（千葉県東庄町）を建てそこで没した。

現在存の本堂等は、昭和 8 年（1933）に再建。

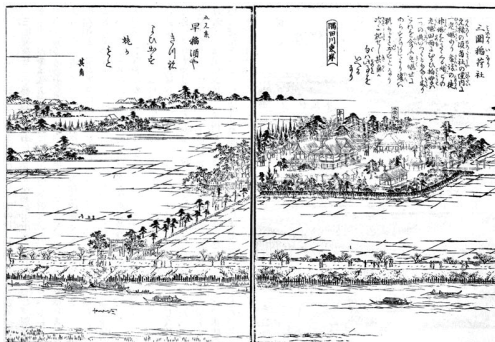
⇒言問団子と桜もちと桜堤（自由・解散）

1 みめぐりじんじや 三囲神社

三囲神社の三角の鳥居は大変珍しい。京都太秦天神川に
ある「木嶋坐天照御魂神社」の三角の鳥居の様式を写して
造られたとされています。

「三越」は、創業家である三井の名と、江戸で開業した
呉服店の屋号・越後屋の頭の2文字をとって、明治2年
(1872)に設立されました。銀座三越屋上には大正3年
(1914)この神社から分社した社が祀られているそうです。
因みに境内には、狛犬の傍らに池袋三越の前にあったライ
オン像が寄付され据えられています。

この他、境内には多くの歌碑を目にしますが、これは、
江戸時代の元禄6年(1693)頃、大変な干ばつで、秋の
収穫を心配した小梅村の人々が三囲神社で雨乞いをしたそ
うで、これを目の当たりにした歌人・宝井其角が能因法師
(平安時代中期の僧侶・歌人)の雨乞い
の物語にならい詩を
読んだことから、その後、境内に多くの歌碑が奉納されたと
伝わっています。17世紀後半は、大名らの間でも古今
和歌や俳句が盛んに詠まれるようになる時期とかさなりま
す。



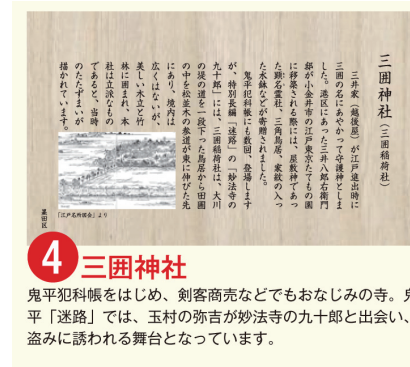
(江戸名所図会より)

2 黄檗宗牛頭山弘福寺

① 牛頭山弘福寺

黄檗宗・牛頭山弘福寺は、寺伝によれば古くは葛飾郡須
田村香盛島にありましたが、延宝元年(1673)に今の地
に寺領を受けて牛頭山弘福寺が開基しました。山号の牛頭
とは、現在、寺の南に位置する牛嶋神社が、その祭神であ
る須佐之男命の別称が牛頭天王であるところから由来して山
号に用いたとされています(「須崎村 弘福寺」『新編武蔵
風土記稿』巻ノ21 葛飾郡ノ2)。

弘福寺は、ご存じの通り京都宇治の黄檗山萬福寺の末寺
です。江戸時代に隠元隆琦によって広められた臨済宗黄檗
派(江戸黄檗)で、江戸の中心的な寺院の一つでした。多
くの大名や商人などによって帰依を受け興隆しました。また、
黄檗宗独特の布袋様(弥勒菩薩)を祀ることから隅田川七



4 三囲神社

鬼平犯科帳をはじめ、剣客商売などでもおなじみの寺。鬼
平「迷路」では、玉村の弥吉が妙法寺の九十郎と出会い、
盗みに誘われる舞台となっています。

(墨田区の観光パンフレット PDF から)



三囲神社



トラファルガー広場の
ライオン像(参考:ロ
ンドン)



(銀座三越屋上の三囲神社)



(旧池袋三越前にあったライオン像)



京都の太秦天神の木嶋坐天照御魂神社には、
三角の社が聖域としてある。



(三囲神社の三角鳥居)



福神の一寺としても人々の信仰を集めています。

春日の局の孫で徳川家光の側近・稲葉正則が干拓や福祉事業に熱心であった鉄牛道機を開山に招き、以後多くの大名（鳥取藩池田家、彦根藩井伊家・津和野藩亀井家など）が熱心に皈依をしたようです。

そして、境内には、稲葉美濃守正則の屋敷に祀られているという「爺婆尊」という奇妙な丸い石仏があります。これは風外慧薫という曹洞宗僧侶が真鶴で自刻した父母の像と伝わっています。稲葉美濃守正則は、風外の父母への孝の思いに接し感銘を受け、風外遊行の後に小田原城内に移し祀ったという。稲葉美濃守正則が移封で越後高田に移ることになったために、江戸下屋敷に移され、その後、弘福寺に祀られたという経緯があるようです。江戸の庶民は、人呼んで「咳の爺婆尊」と称し、口中に病のあるものは「爺」を、咳などで病むものは「婆」に祈願すると病気が平癒すると信じ、参詣がたえなかったようで、今日にもその信仰が伝わっていてお参りされています。

② 開山・鉄牛道機和尚について

鉄牛和尚の足跡を簡単に触れますと、長門須佐（山口県）に生を受け、若い時に母の実家とされる因幡の広徳山龍峰寺に学び、その後大坂大仙・洛西花園妙心寺・阿波瑞巖寺・淡路興国寺など各地を遊行し、長崎に隠元隆琦が東渡することを知り参禅しました。その後、隠元が堺の普門寺に向うと、長崎福濟寺木庵性瑢に参禅、会下に入りました。そして、万治元年（1658）冬、檀越稲葉美濃守正則らに請われて相模麟祥山紹太寺住持となりました。

寛文9年（1669）に葛飾郡新田香盛島の弘福寺の古跡を得て、寛文12年（1672）、現在の牛島に移し、延宝元年（1673）春、牛頭山弘福寺開山となりました。一方、師である木庵性瑢は、延宝3年（1675）、江戸瑞聖寺の開山であったが隠元隆琦の後を継いで萬福寺2世として京都宇治に帰還します。これを受けて鉄牛が瑞聖寺の第2世を継ぎました。延宝4年（1676）、紹太寺開堂、同6年（1678）、美濃加茂藩主松平丹波守光永の正室長松院の菩提を弔うために、本山塔頭長松院が建立されたのを機に長松院開山に請われました。貞享元年（1684）木庵性瑢示寂に際して導師となる。同年法弟慧極道明を推薦し弘福寺を退院した。また同年稲葉正則の移封に伴い、葉室山浄住寺に移ることになりますが、この時には、伊達四代藩主綱村の世子・扇千代の遺館が浄住寺に移設され復興されました。元禄2年（1689）12月15日、浄住寺檀越葉室頼孝・頼重・万里小路淳房に請われて晋山しました。元禄8年（1695）3月、黄檗五代高泉性澈の第八回開戒に際して羯磨阿闍梨を務め、翌年、稲葉正則の葬儀で導師を務め、元禄10年



《江戸黄の檣派》

江戸の黄檗派は、海福寺が最初に隠元隆琦を開山として創られ、それ以降、庵も含め28ヶ寺が展開しました。

この背景には、徳川家康の入府に伴う江戸の拡大があるようです。それまでの深川付近は、地名でも明らかにように（亀島、大島、宝六島、永代島）に小島が点在した低湿地帯でした。

しかし、明暦の大火（振袖火事 - 明暦三年〈1657〉年1月18日～20日）によって江戸市中の大半が消失してしまい、江戸の都市改造が行われました。

御三家の屋敷をはじめ武家屋敷・大名屋敷、寺社の多くが御府外に移転しました。この時に、葛西郡深川・同郡須崎や多摩地区では開発が進み、多く寺が移転再興されました。

特に今回訪ねた向島をはじめ当時の葛飾郡内には10ヶ寺の黄檗派寺院がありました。

《明暦の大火以後の幕府の施策》

幕府は、明暦の大火以後、都市防火の諸策を享保期（～1736）までに施行した。例えば防火建築推奨。武家屋敷・寺の分散。火除土手・火除空地・広小路の設置。

(1697)には伊達綱村に請われて仙台大年寺の開山となっています。元禄12年(1699)に、島津綱貴に請われて鹿兒島護国山真福寺の開山祖として住持となりました。

また天恩山羅漢寺の松雲元慶の五百羅漢完成に際して、開光及び千僧供養に应じています。そして黄檗宗の社会福祉事業の代表的な事業としても著名な下総香取郡椿新田の干拓事業が挙げられます。

このような干拓事業は、臨済宗から黄檗宗へ改宗した龍溪性潜の黄檗興隆事業、鉄眼道光の『大蔵經』開板事業、了翁道覚禅師の『大蔵經』寄進と日本最初の図書館事業などと並び称される黄檗山大事業の一つとして言い伝えられています。なぜ、このような慈善事業を熱心に行ったのかということは、浄住寺の開基に由来しています。

浄住寺開基を紐解くと、その開基は古く、弘長元元年(1028)に葉室定嗣(1208～72)が叡尊に師事し出家、叡尊を招いて西桂の山荘を結界し西大寺派の律宗末寺としたことに始まります。浄住侍の由来を鉄牛は認識しており、叡尊の行った慈善事業作善に学び、その憧憬が下総香取郡椿新田における干拓事業へと繋がったとされているのです。

元禄13年(1700)8月20日、下総香取郡椿の補陀落山福聚寺にて73年の世寿を全うし、9月8日茶毘に付されました。同9月14日葉室山浄住寺石窟に建塔したとされています。鉄牛の没後の13回忌には、正徳2(1712)年8月14日、霊元上皇から「大慈普応禅師」の諡号が贈られています。

鉄牛の墓所は、「葉室山浄住寺石窟に建塔」という点と、墓所(浄住寺<京都西桂>と福聚寺<東庄町小南>)の様式を比較してみると、福聚寺が無縫塔に対して浄住寺は、木庵性瑠墓所に倣って黄檗様式であること。諡号に対する頌徳の亀趺碑が造立されている点を鑑みると、浄住寺には分骨されている可能性が高いものと思われる。

浄住寺に伝わる『浄住寺伽藍並絵図』を見ると「舍利殿」と表現されています。

現在の伽藍とその位置はほとんど変わっていません。機会があれば京都西桂の鉄牛道機の墓所を訪ねて下さい。

椿海干拓事業について

東庄町・干潟町・旭市・八日市場市にまたがる低湿地帯は、かつて海水が湾入していましたが、沿岸流の発達により閉鎖され椿海という湖となりました。

寛永16年(1639)頃から椿海の新田干拓が計画され、大工事は寛文11年(1671)に完成しています。この事業によって干潟八万石といわれる良田2741町歩が整備され、18か村が形成されました。その中心となったのが鉄

牛和尚です。鉄牛和尚は、椿海の開拓による功績で寄進された福聚寺(東庄町小南)で晩年を過ごし、元禄13年(1700)73歳で永眠しました。

弘福寺のご本尊と仏師・松雲元慶

御本尊は松雲元慶作の釈迦如来坐像です。鐘樓の梵鐘は井伊家玉心院大禅尼喜捨とされています。七堂伽藍の整った寺でありましたが、江戸時代の度重なる大火や関東大震災で焼失し、現存の本堂等は、昭和8年(1933)に再建されました。特に本堂の両翼にある円窓、堂前の月台、処々柱に掛かる聯額などは、他の寺院建築に余り例を見ない黄檗宗独特な様式と言えます。

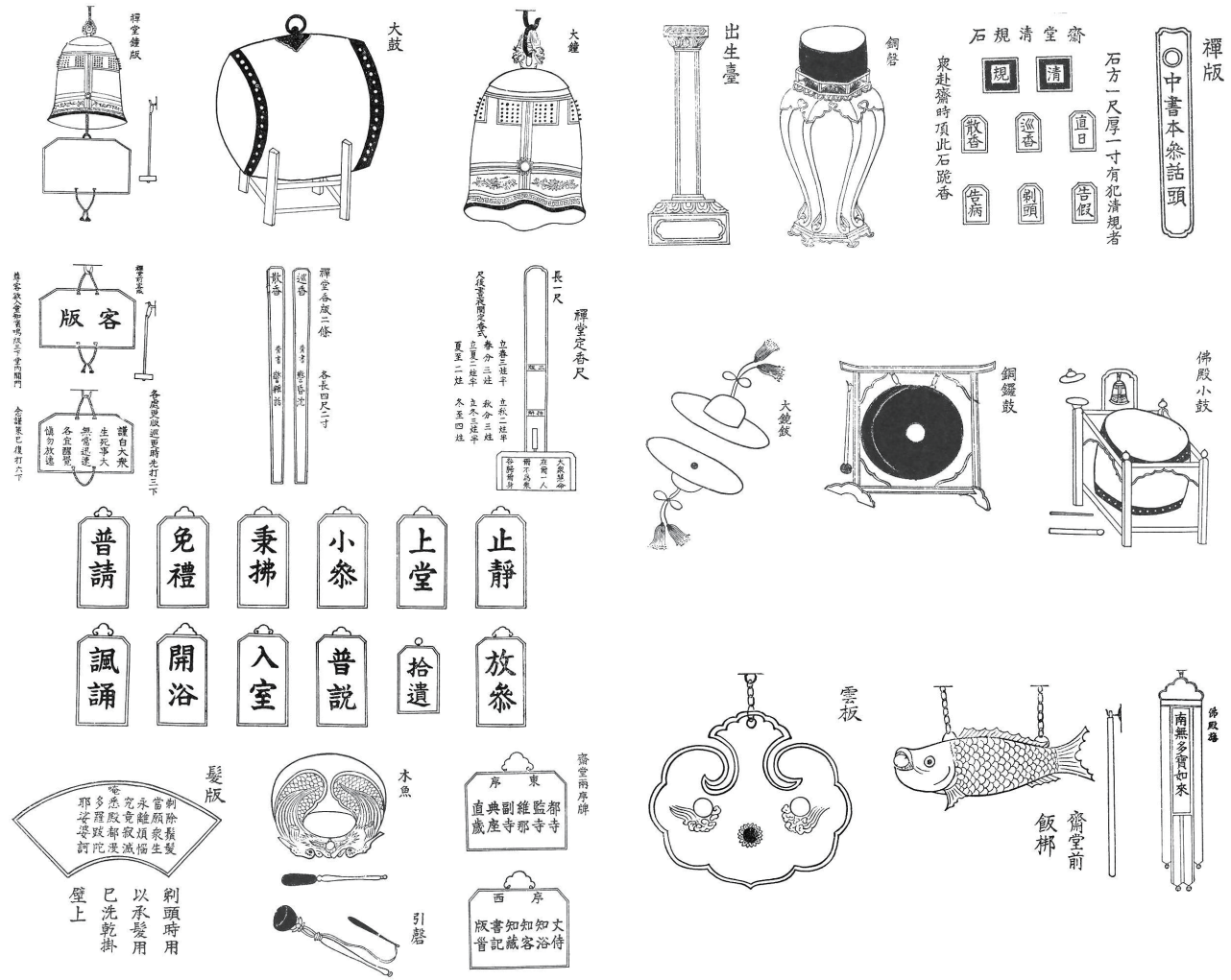
表 松雲元慶の製作仏と年代	
製作年代	製作仏と所在
寛文九年(一六六九)	大阪府瑞龍寺の鉄眼道光に弟子入り
延宝五年(一六七七)	大阪府神鳳寺釈迦三尊像のうち両脇侍像、造立(現大)
延宝六年(一六七八)	京都府神鳳寺所蔵、阿弥陀、弥勒像他、造立
貞享四年(一六八七)	大阪府瑞龍寺薬師三尊及び十二神将像、造立
貞享五年(一六八八)	五百羅漢像の彫刻を発願して江戸へ下る
元禄三年(一六九〇)	奈良県法起寺木造十一面観音立像を修復
元禄四年(一六九二)	東京都弘福寺釈迦三尊像、韋駄天像はが、造立
元禄五年(一六九二)	東京都羅漢寺五百羅漢像、造立始め元禄五年(一六九二)
元禄六年(一六九三)	五百羅漢像の数体を彫り始める。浅草寺塔頭寿命院門内に飯屋を建てる
元禄八年(一六九五)	五〇尊を彫り上げる。丈六釈迦像を彫り始める
元禄九年(一六九六)	本尊以下五百羅漢像完成、高泉により開眼
元禄十年(一六九七)	羅漢寺千僧供養
元禄十三年(一七〇〇)	宮城県大年寺釈迦三尊像造立。羅漢寺諸像の大半が完成
宝永七年(一七〇〇)	千葉県福聚寺寶頭盧尊者像、造立
没	没

弘福寺と所縁の人々

境内には、鳥取藩歴代藩主の墓、若桜藩(鳥取西館新田藩)藩主池田冠山、儒家南宮大湫(代々尾張藩家老竹腰氏に仕え、細井平洲に学ぶ)、曆算家桃東園(著書に「異字同訓」、儒者林東溟等の墓がある。弘前藩家老の子で、賀茂真淵に学んだ建部寒葉齋綾足の碑等もあります。また、森鷗外は少年時代この地域で過ごしており、津和野藩主の菩提寺の関係から、没後弘福寺に葬られています。しかし、震災後の隅田公園造成のため、三鷹禅林寺へ改葬されました。

風外禅師の自刻の父母の石像があり、「咳の爺婆尊」と称し、風邪除けとして古来より信仰を集めております。石像の向い側には同和尚の顕彰碑があります。

また、文化文政の頃より、隅田川七福神詣りの霊場の一つとしても知られております。



黄檗派 法具（梵唄）

参考文献

- 柳田聖山 一九九六「隠元の東渡と日本黄檗禅」（源了圓・楊曾文編『宗教』日本文化交流史叢書4）。
- 竹貫元勝 一九八九『日本禅宗史』。
- 根岸茂夫 一九八七 近世前期川越藩の新田開発―武蔵新座郡野火止新田を中心に（『国史学』一三三）。
- 森 安彦 二〇〇〇「近世多摩の新田開発と寺社・享保期新田と黄檗宗寺院」、『中央史学』二二八）。
- 平久保 章 一九八九『隠元』（吉川弘文館）。
- 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編著 一九八八『黄檗文化人名辞典』（思文閣出版）。
- 和田金左 一九七六「伊勢原市に於ける黄檗寺院」（伊勢原市文化財協会）。
- 遠藤廣昭 一九九〇「黄檗派江戸八家庵の古跡並御免とその機能」（『江東区文化財研究紀要』一四）。





東京弘福寺



東京弘福寺



東京豪徳寺



仙台大年寺



萬福寺白衣観音

図 10 弘福寺・萬福寺仏像の巻蓮華



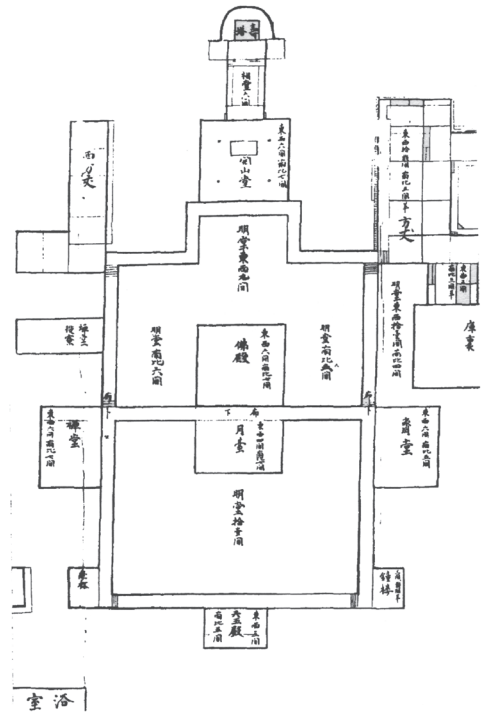
鳥取藩歴代墓改葬の様子



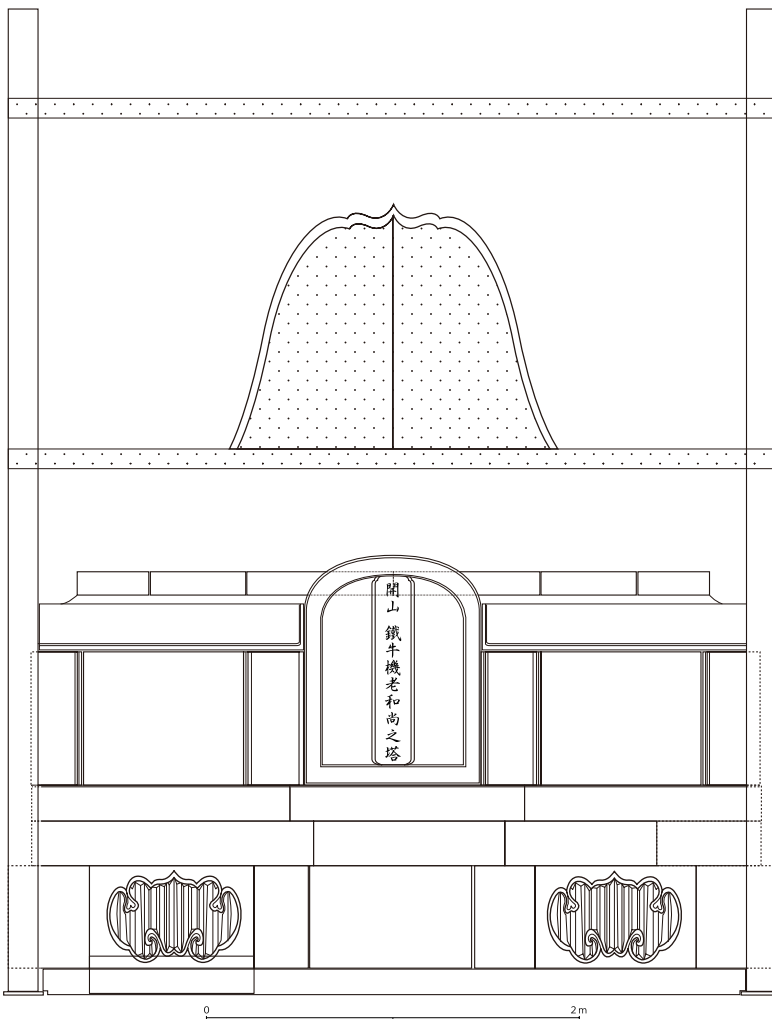
池田冠山墓



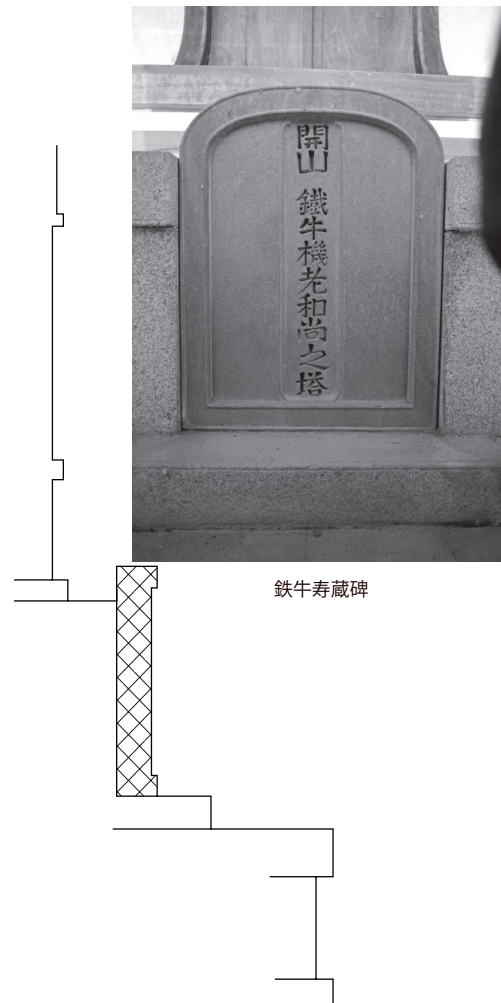
参考 萬福寺四世独湛性瑩廟



浄住寺伽藍古絵図（山本輝雄 2005 より）



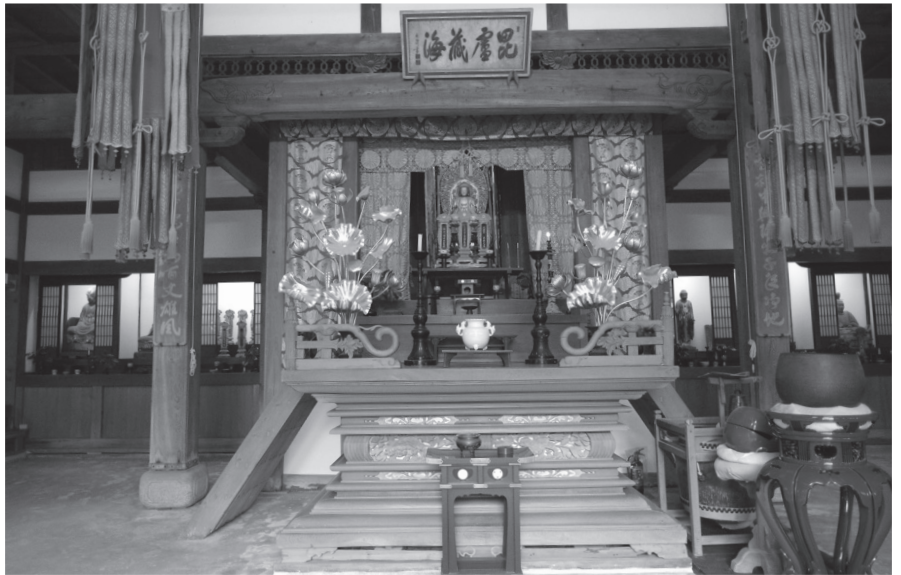
鉄牛道機寿塔正・段面図



鉄牛寿蔵碑



浄住寺釈迦像



浄住寺本堂



図 17 華光菩薩像



同 鉄牛道機椅像と位牌



同 鉄牛道機椅像と位牌